

# 建築家の檻



連載7

Grasshouse

数日後、朝早く予定が組まれていた別件のカタログ作成の打合わせから喜多見に戻ると、もう、二時を少し過ぎていた。

部屋の近くのマンションの建設工事が進んでいる。地鎮祭が終わって、基盤工事に取りかかったところらしく、コンクリートが低い壁のように張り巡らされ、黒っぽい鉄の棒が突き出していた。道路近くの道端の叢に表示が立っていた。

建築計画のお知らせ『橘マンション』

——建築主・橘孝造 施工・岡松建設株式会社 設計・山際設計事務所——

普段はこんな表示は読みもしないのだが、最近は妙に気になってしまう。乾いたコンクリートで汚れた空色のライトバンが一台横付けになっていたが、作業員たちはそこにはいなかった。

公園の銀杏の葉が、あたりいちめん金色に敷き詰められている。二階西側の自分の部屋のベランダを見ると、カーテンが開けられているのが見える。籠子が来ているらしい。

ドアを開けると、この寒いのに籠子が水色のバスタオルを巻いた姿のまま、キッチンで水を切り皿を拭いていた。唇に、火のないタバコをくわえている。

(なんて格好、してるんだよ)

何かおいしそうな料理の匂いがしている。作りかけのシチューか何からしい。しかし僕はすでに昼飯は済ませていた。

「ねえ、さっき例の凶々しいオジサンから、電話あったよ」

彼女は両手を動かしながらふりむいた。

「また床濡らしちゃって。ちゃんと拭いとけよ。ふーっ疲れた」

「だって、いまシャワーからあがったんだもん。何よ、せっかく食器を洗っておいてあげたのに。二日ぐらいいも溜めてたでしょ。あれじゃ料理できないもん。……それと、あのおデブの人から電話。猪八戒みたいなの。何て言ったっけ。いつも息使いが荒くて、ゼイゼイうるさい人。ほら、ツトムにお仕事くれる人さ」

彼女はタオルの胸を片手で押さえると、口を尖らせ、パチンと勢いよくライターを閉じてタバコに火をつけた。よく動く華奢な肩甲骨のあたりに、淡い産毛が見える。

「なんだ、色川さんのことか」

二本の指でタバコを挟み、ふぁーっと煙を吐いてみせる。

「すぐ連絡欲しいって。携帯の方の番号知ってるでしょ」

「ああ」

僕はバッグを投げ出しCDをかけた。なんとなく、怒りや不安のまじった気分だ。ストレスを

溜めこんで嫌な仕事をやっているのが馬鹿みたいだ。

わざと重いクラシック曲を選んだ。シベリウスの『フィンランディア』。仄暗い霧の中に民族的な闘争心を帯びた旋律がゆっくりと立ち上がる。

僕はベッドに横になって、天井に針葉樹の森や澄み切ったフィヨルドを思い描きながら、タバコをふかした。

「暗いなあ、この曲。ねえ、夕飯どうするの？ シチュー作りかけなんだけど」

範子は隣に割り込んでベッドを軋ませ、唇を尖らせながら言った。僕がバスタオルの端を片手でスッと引っばると、キャハハと笑ってタオルをわし掴みにし、体を振らせ抵抗する。片方の太ももと下腹部の半分があらわになった。腰骨のわきに、褐色の薄い小さなほくろがある。白い胸のふくらみが揺れて、タオルからあふれた。

「うん。とりあえず色川さんに連絡してみるよ。それからだな」

「ふうん。じゃあ、そっちで食べるんだ」

不服げに頬杖をついて、顔を並べた。少しおいて、横からおでこを軽く、ぶつけてくる。いつになく違和感を感じた。

「わからない。でも、多分」

範子は、僕の頸筋を片手で掴んだ。そしてマッサージでもするように、指に意地の悪い力を込めて、揉みほぐすようにする。

「痛いなァ。ああ、気持ちいい」

すると範子は、ぴしゃりと軽く僕の肩を叩いた。

「何でそうやっていつも、気もそぞろなのよ。あたしが目の前にいながら、別のこと考えてるでしょう。……バカあ。もっとテメエの女、大事にしろよなァ。最近、仕事ばかりじゃんかよう。映画の約束も、美術館行く約束も守らないし」

少し言葉が出てくるのに間があった。喉の奥に何か詰まっている。僕は範子が「水商売の女」っぽくなっていくのが嫌だった。自分では気づいていないらしい。

「あのな……。もっとマシな部屋に引っ越しするため、こうして忙しくしてるんじゃないか」

「でも、仕事を口実に、何度も無視されてるもん、あたし」

「経済状態がこうなんだから、しょうがないだろ。ヒトにこき使われて生きていくしかないんだよ」

「何でそういう言葉を口にするの。そういうネガティブな愚痴、聞きたくないよ。あたしだって好きでいまの店にいるんじゃないもの」

「嘘つけ。楽しそうじゃないか、ずいぶんと」

「やめてよ。そういう言いがかりは。ツトムがそんなふうにとんどんネガティブになっていくの、見たくないよ」

「それなら、聞くなよ。現実がそうなんだから、しょうがないだろ。だいたいどこで覚えたんだ。ネガティブだの、ポジティブだの。そんなきいたふうな言葉、使うなよ。……誰に教わったんだ。どこかの馬鹿なスピリチュアルなセミナーでも、覗いてきたのか。そもそも、ポジティブシンキングさえしときゃ、この人生が、うまくいくのかよ」

範子は恨めしそうに上目づかいで、こちらを睨んだ。

「せっかくあたし、一生懸命、物事を明るく、何とか明るく、考えようと努力しているのに」  
「そうすりゃいいさ」

「いいよ。もう誕生日来ても、何もやってやらないから。言っとくけどあたし、お店で客にモテるんだからね。知らないよ。どうなるか分からないよ。居なくなっただけじゃ遅いんだから。もう自分でもわからない。あたし、情緒不安定なの、知っているでしょう」

僕はその言い草に反撥を感じた。

ベッドから跳ね起きて、彼女の腕をつかんだ。タオルが外れて、乳房の片側がむきだしになった。範子は僕の手を避けようとして、胎児のように横に体を曲げて体を隠した。

「なんだよ、最初からこんな恰好しているくせに」

タオルを引っ張りあげ、思い切りむしり取った。僕はいくぶん、嗜虐的になっていた。愛情なのだか、微かな憎しみなのだか、あるいは意地悪だかわからないような、暗く酸っぱい感情が、僕の鳩尾のあたりに渦巻いた。

僕が彼女の脇に体を寄せると、そのまま端の方に丸まっていたタオルが脚に絡まり、ベッドの下にずり落ちた。

シベリウスの『フィンランディア』の曲が、しだいに暗い耀きと弾力を帯びて、盛り上がっていく。寄り添った僕は、範子の髪に後ろから手を差し込んで、少し優しく撫でた。こんな場面に、この民族主義的な音楽はまったく場違いだった。

それでも無抵抗になって、横を向いて呼吸している彼女の白い裸体を見ているうち、柔らかな気持ちかわいてきた。彼女の肩に力を入れて、わざとこちらを向かせた。

範子は薄く口を開けて、僕の方をぼんやりとを見ている。鎖骨のところのくぼみや、まるみを帯びた乳房の間から、なめらかな臍のあたりを、人差し指でなぞった。煙のような毛で覆われた柔らかい丘に、指を差し込む。

「……大変なんだよ。フリーはさ、仕事断れないし」

かすれた声で耳元でいうと、範子は大きく呼吸しながら、妙に肘をねじって、僕の手首を押しつけるようにつかみ、せつなそうに体を反らした。カーテンを透かした光が、尖った乳首の小さな影をくっきりと際立たせている。あたりにリンスの匂いが発散している。

「務クン、部屋片付いてるでしょ。少しは感謝しなさいってば」

しわがれた小さな声を唇から発した。「キミはね、感謝が足りないよ。いつも」

僕は周りを見渡した。確かに丁寧に片付いている。

「ありがとう」

「言われて気づくなんて、面白くない。ちっともあたし、面白くない。もっと感情をこめて。感動のねえ奴、嫌い」

そして、下の方を、ぎゅっとなつかれた。

「そうだね。俺は、感謝が足りない奴だ」

「ほんとうに、そうだよ。じゃないと、あたし、どこか消えちゃうよ、そのうちに」

範子は少し涙ぐんだ声になっていた。「いいの？」

僕は何となく、赤峰葉のときのことを思い出して嫌な気がした。

キスをしようとする、両手で突き放すように跳ね返され、少し怒ったような目つきをして、猫のように睨みつけてきた。僕は「痛いじゃないか」といって、怒ったような顔を作り、彼女の白いうなじに唇を押しつけた。範子は体をひねり、乳房を揺らしながら「ツトムが最初に痛くしたんだもん」と言った。

「もっと痛くしてやるぞ」というと、急に「やだァ」といって、子供のようにしがみついてきた。そして彼女がときどき見せる迷子になった少女のような顔になった。これは仲直りの印なのだ。胸に耳をあてるようにして、しばらくじっと、瞬きをしていた。呆けたような顔になって、僕の背中に手のひらを這わせ、体の輪郭をなぞっている。

僕は北欧のフィヨルドの風景を考えながら、ふさふさとした栗色の髪に、鼻をおしつけた。それから彼女の体の真ん中をたどり、頭を少しずつ、ずらしていった。水っぽくて、懐かしい匂いがした。彼女の髪の暗い匂いの中に、北欧の暗い透明な湖や、切り立った断崖を連想した。渦を巻いてうねっていく弦楽器の群れの頂点で、打楽器が激しく炸裂した。しかし、そのときはもうシベリウスなど、どうでもよくなっていた。

すでに午後遅くなっていた。外で近所の主婦が挨拶している声が聞こえた。室内では『フィンランディア』の曲はとっくに終わってひっそりとしていた。

雲が割れたのか、外が少し明るくなり、ベランダに雀が来ている。

軽くシャワーを浴びてから、色川さんに電話をした。

—おう羽木か。連絡遅いじゃないか。セックスでもしてたんじゃないか。

「いえ、いまベランダの鉢植えに水をやっていたところですよ」と僕は応えた。

—あのな、打合せ、あと二十分で終わるから待ってくれ。どうやら、丹下喜作の住所、お前のとこの近くみたいだぜ。喜多見の隣の成城学園だよ。そっちに行くから、一緒にちょっと覗いてみないか丹下邸を。明るいうちに。昔やった週刊誌の連載じゃないけど「お宅、拝見」てわけです。妙に気になるんだな、あの一族。

—ヒトの家を覗くんですか。悪趣味な気がするけど。

—ナニをいまさら。上品ぶるなっていうの。それに喜作爺さんの自分史を書くためにも、奴の日常生活の雰囲気は、押さえておいた方がいいぜ。例の何だっけ、『人生連峰』？『人生連峰—私の半生記—』か。だっせえタイトル。俺様に任せてくれりゃ、もっと気の利いたのつけてやったのに。

—あのね、それ、僕がつけたんじゃないですよ。会長が自分で言い出したんだ。

というようなわけで色川さん—範子にいわせれば猪八戒—の指示で、急に成城学園の駅近くの喫茶店で待ち合わせするハメになってしまった。

「シチュー、どうすんだよう。せっかくいいお肉、選んだのに。腕によりをかけて作ったのに」

薄い部屋着をひっかけた範子は、膝を抱えて怒ったように壁を睨んでいた。両手で泣きまねのポーズをしてみせる。少しわざとらしい。出合った頃はこんなところも可愛らしいと思ったも

のだ。

僕はキッチンに行って、鍋の中を覗いた。

肉の塊のまじったシチューを、無造作に小皿に取って、口にした。

「ほう。旨いな、これは」

範子はうらめしそうに、下唇を噛んで睨んでいる。

仏頂面のまま、僕は謝った。マフラーを首に掛け部屋から出ていくとき、ドアの内側で、枕か服か何か柔らかなものを投げつける鈍い音がした。

成城学園駅近くの観葉植物の多い明るい喫茶店で待っていると、約束の時間より四十分ほど遅れて色川さんは入ってきた。あまり晚いと、暗くなってしまう。

黒いサングラスをつけていて、人相を隠しているようだけれども、そのせかせかした動きだけでも、知っている者は誰だかわかる。でっぷりとした顔が、黒い革ジャンの上ののっぺりとして、暴力団とコメディアンの間のような人種か、あるいはアダルトビデオの監督あたりに見えないこともない。

「悪リィな。打合せ、二十分で終わる予定だったんだけど。暑いね、どうも」

すでに季節も季節なので、全然、暑くはない。グラスを外すと、酒でむくんだ顔が現れ、ニカッと笑った。

この寒いのに荒い呼吸をし、ハンケチで首の後ろを拭っていた。とりあえず色川さんは、両手をごしごしこすってから店員を呼び、小さなエスプレッソで景気をつけた。小太りのうさん臭い中年男が、サングラスをずらして、ちらちら見るので、バイトの店員の女の子は、少し彼を怖がっていた。

僕がうっかり、この近くの大学生かも知れないというと、

「そんなわけないだろ。成城大学のお嬢様が、バイトなんてやるわけがない」と決めつけた。いつものことだが、色川さんは固定観念が激しい。しかし、そんな議論をしても無意味なのでやめにした。

店を出て、閑静な住宅街の方へと向かう。辺りはひっそりとして、宏壮な邸宅が並んでいる。車もときおり徐行するが、あとは犬を連れた老人が通るくらいだった。

道の幅も比較的広く、緑も多い。左右には桜の古木が並木になっていて、春先は見事な眺めだろう。

すでに四時近くになっていた。オレンジかがった日が射ってきて、アスファルトに含まれた細かなガラス質が、路上で輝き始めた。

緩やかな傾斜のある坂に入ってゆくと、脇に仄暗い乱雑な竹林の一面が見え、道路が少し陰になった。

耳を澄ますと、竹の葉が黄色い光を透かして、擦れたような乾いた音を響かせていた。樹木や植え込みの向こうに、かなり凝った造りの豪邸が並んでいる。

「番地でいうと、どうもこの辺なんだがね」

「もう少し、先じゃないですか」

「……それにしても、まいっちゃったよ。こないだ新宿の店で、笠置部長から電話が入った件あったろう。あれでえらい大目玉食らっちゃってさ。秋葉の田川電機、あそこの仕事、なくなるかもな」

「大変ですね、経営者って」

「なあ、羽木。務ちゃん」急に色川さんは、気味の悪い猫撫で声を出した。体を丸めて、革ジャンに両手を突っ込み、いやに媚びるようにニタニタしている。

「何ですか。気持ち悪い」

「何とか会長にうまいこと言って、丹下建設のPR誌か何か、取ってきてくれねえかなあ。何でもいいんだ。チラシでも何でも。取っ掛かりさえつかんで、小さい実績作れば。そこからもっとおいしいパンフレットとか、広告の方に引っ張っていく。ほら、去年の暮、新宿で飲んだ植鳥って奴いたろう、赤坂の代理店に勤めてるの。あいつと組んで、少し大きい仕事を取りたいんだ。勿論、お前もスタッフにしてやるからさ」

(そらきた。やっぱりそういうことだったんだ。営業だの、胃カメラだの、一体僕は)

「長期的には、考えますけど」

「もちろんもちろん。ま、そこを何とか。この、老人キラー！ 好青年。優等生！」

いきなり僕の背中を、太い肘でどやしつけた。

「叩くなよ。痛いなあ。馬鹿にしてるんですか。誉めてるんですか」

「おお、よしよし。誉めてる誉めてる。……営業してよ、営業。ホレ、うまいことチョチョイのチョイでさ。成功報酬に、ソープ奢ったから。いや、ファッションヘルス半額出してやるから。池袋にいい店できたんだよ」

「いいですよそんなの。あ、あそこ。あの妙な建物じゃないですか、ひょっとして」

樹木の向こうに、特徴ある館のような建築が見えた。車が少ないのを見計らって、急ぎ足でその家の前まで近づいて表札を見た。

『丹下喜作』『丹下聡太郎』

主の名が堂々たる灰色の石の門に表示してある。その脇には個人の家の庭木としてはかなり大きなヒマラヤ杉の枝が、塀を超えたあたりまで張っていた。

その全体は広大な構えだが、瀟洒や洗練という言葉からはおよそ程遠い陰鬱な建物で、何か小型の迎賓館と要塞とを合体させたような、異様な建物だった。それにしても、これが鷺巣数光の設計した丹下邸だろうか。個性的といえば個性的だが、どこか住む者を嘲弄しているような妙にちくはぐした印象が漂っていた。

僕はいつのまにか『ゴーストアーキテクト』からの密かな通信を『ゴーストライター』として解読するというゲームを愉しむようになっていた。会ったこともない鷺巣数光が仕掛けた謎解きを、秘かに楽しんでいるといった寸法だ。しかし素人目にはどう見ても、俗悪一步手前の折衷建築としか思われぬ。壁には訳の分からぬ植物装飾のようなレリーフが彫り込まれているし、アールヌーボー風というには、東洋的すぎる。唐草模様めいた天平美術の天女の群れのような形象が、楼閣のように跳ね上がった屋根の下に描かれている。



青銅色の屋根には、煉瓦造りの四角い煙突からの雨の跡らしい汚れた条が、幾つもシミを滲ませて流れ落ちていた。

特徴ある屋根を見ていて、一瞬、閃くものがあった。

（これは、ハルピンの建築じゃないか――）

この屋根は帝冠様式というらしい。この前、渋谷の図書館で満州諸都市について調べていたら、ハルピンの市街がアールヌーボー様式の建築によって作られたという解説があった。ヨーロッパの最先端の様式を極東の都市に造型させることで、ロシア国家の威信を誇示するという戦略だったそうだ。それに倣って、満州諸都市、新京、奉天、大連など日本人の多い市街でも、アールヌーボー、アールデコといった先端様式と、伝統的な中華様式を融合させたいわゆる中華バロックとでもいうしかない建築様式で、公共の建造物が次々と作られていったということである。

その古い建築写真の中でも、特に印象的だったのが、先日、色川さんに教えて貰った色あせた建築専門誌の中の「ハルピンの悪魔城」という古ぼけた写真の建物だった。

ハルピンの悪魔城とは、張周明という男が建てた巨きな楼閣のような豪邸で、これまた折衷主義の奇怪な建造物であった。

曇天の下に幾つかの楼閣や尖塔がそびえる異様な建物を背景に、張とその家族が芝生のある中庭で、着飾って並んでいる記念写真が印象的であった。

この張という男は、先日、喜作会長の話にも出てきた男で、ボスの廣澤大悟郎や、仙術家の白元老人、それに阿片王の里見甫や、七三一部隊の石井中将の下働きをして満州から華北、上海、香港にかけて、縦横に活動していたという人物だ。

朝鮮系中国人で、満州国建国の際にも関東軍の手下として汚れ仕事を請け負い、物資の調達のみならず、さまざまな非合法的な仕事で暗躍して莫大な資産を築いてのし上がった人物らしい。会長によると、憧れのチェイリンさん、つまり満映女優の日本名でいうと久美麗子を、凍りついた河の岸辺で、恋人とともに斬殺して、冷たい水に沈めた男だというのだ。

どんな恐ろしげな顔をした奴かと僕は思っていた。しかし、「これ面白いだろう」と色川さんに言われたある写真を見ると、やせた長身の張周明が、頭に椀のような辮髪帽を被り、黒い丸メガネをちょこんとかけて、清朝の高官ふうのスカートのようなものをはいて写っていた。後ろ手を組み、三四人の美女たちに、すがりつかれるように取り囲まれている。口元には皮肉な微笑を浮かべ、ギャングというよりもむしろ、大学教授のようなインテリふうの雰囲気があった。

下のキャプションには「ラストエンペラー・愛新覚羅溥儀をまねてポーズをとる張周明」とあった。得意の絶頂期にあった張が、日本陸軍関東軍の傀儡の皇帝溥儀がよくかけていた黒メガネを真似て、おどけているのだ。つまり彼は、そんなことをしても問われない位置にいたらしい。彼がはべらせている扇を持ったあでやかな女達は、後宮の美姫たちという演出かも知れない。

別の写真では、上海か香港の高級ホテルらしき明るいテラスで、椅子に座って脚を組み、西欧人と歓談していた。昔の映画に出てくるようなパナマ帽を被り、白いジャケットを着て、太い葉巻をふかしながら鷹揚にかまえている。遠景にけぶる船の停泊する水平線は、揚子江か香港あたりの明るい泥海だろうか。

彼は丹下会長のボスであった廣澤大悟郎や、怪しい仙術家の白元老師のすぐ脇にいた満州阿片



人脈の中の一人のようだ。

実際、最後の清朝皇帝、つまり満州国皇帝であった愛新覚羅溥儀に、顔立ちも背格好もよく似ていた。いや、もっとニヒルで鋭角的で、知的な雰囲気を持っていた。本人もそのことを楽しんでいたのである。

「しかし辛島さんによると、この張という男は、戦後は漢奸にされるのを、恐れていたんだ」

そのとき、色川さんはいった。

「カンカン？ 何ですか、それは」

「漢奸とは、戦前戦中に渡り、日本と通じていた漢民族への裏切り者のことさ。日本の敗北が決定的になると、家が襲撃されたり、家族が群衆に殴打されたり、娘が強姦されたり、略奪にあったりするわけだ。たとえば、日本の傀儡政権といわれた南京政府の汪兆銘という政治家が典型的だ。死んだ後でもコンクリートで作られたお棺がダイナマイトで爆破され、見るも無残な遺体が引きずり出された。若い頃の汪兆銘ってのは、甘いマスクの二枚目で有名だった偉丈夫の政治家なんだな。一般の女にも人気があった。それがもう、死体も引きずり出されてズタズタにされた。……日本人の発想にあるような、死んだらみなホトケ、というあっさりとした考えは、あちらには、ないんだな」

「凄いですね。絶対に許さないわけだ」

「しかしな、張の場合は特殊なケースなんだよ。通常は殴り殺されて死んだといわれているが、それはじつはあらかじめ用意されていた中国人苦力の替え玉で、その後、張本人は、アメリカに渡ったという噂もある。ソ連南下の情報をいち早くキャッチして、関東軍とともに脱出したのだろう。一説によると、戦後しばらくは、ハワイ島のコナという町にひっそりと潜伏し、愛人とともに、椰子の木陰から太平洋の渚を眺めながら、何年間か療養していたともいわれる。大日本帝国の戦犯たちは巣鴨で処刑されたのに、一体この男は、どっち側の人間だったんだ、ってわけさ。

しかし張自身も、終戦前後のどさくさで、かなりの怪我はしていたらしい。「ハルピンの悪魔城」は焼打ちにあって燃やされたし、命からがらだったのだろう。もともと、張周明には、二重スパイ、三重スパイ説があるわけよ。何者かの司令によって、阿片王の里見甫や、七三一部隊の石井四郎に指示を出していた連絡係、手配者は、張周明ではないかという見方もありえる。つまり、下働きではなくて、ほんとうは黒幕だったという」

「そういう説が、あるんですか。しかし、何で色川さんがそんなことを……」

「いまのところは、ある変わり者のジャーナリストの異端邪説の一つに過ぎない」

「ひょっとして、それ、辛島さん？」

すると色川さんは、目を薄く開いてしょぼしょぼさせて、こちらを見ながら、「ノーコメント」といった。

優越感に浸って悦に入っているとき、彼がよくやる表情だ。

「……それはそうと、張周明が戦後も生き延びているとすると、なかなか話はやっかいなことになる。もともと奴は、何があっても殺されないというシナリオがあったかのも知れない。これ、何を意味するかわかるかね、ツトム君」

「いえ」僕は色川さんの真剣な調子に、いささか戸惑った。

「あの大東亜戦争は、ほんとうに日本人の意志で行われた戦争だったのかという……」

「――太平洋戦争、ですか」

「大東亜・太平洋戦争だ。俺は右でも左でもない。そういう単純な二元論には、くみしたくないんでね。……ともかく、十二月八日、パールハーバーを境に、中国相手の前半と、アメリカ相手の後半とでは、意味がまったく、違ってきてしまった」

僕はなぜか少し不安になってきて、目をそらせてしまった。

「それって、丹下会長が、戦後の日本は、透明な檻の中だといった話と、つながりますか」

「そう……かもな。わからんけどさ」

色川さんは、夕陽の中で歩きながらタバコをくわえた。

いずれにせよ、丹下喜作周辺の人脈には、どうも闇が多すぎる。

それにしても、人間というものは、金が溜まり権力を持つようになると、自分ならではの城を作りたがるものらしい。ピラミッドも、中世ヨーロッパの王侯も、皆そうだ。そして、この丹下喜作邸の帝冠様式の屋根も、どこことなくあの「ハルピンの悪魔城」の雰囲気醸し出している。――ひょっとして、二十歳前後の喜作少年がハルピンで瞠目した建築が、そのままここに再現されているのではないだろうか。つまりこの『丹下氏邸』は、満州諸都市に見られるようなアールヌーボー、アールデコ、中華バロック、そしてもちろん和風建築に加えて、ポストモダン的な引用のいわばごった煮建築なのだ。

おそらくは過去の満州時代の記憶を生きている喜作老人の独善的な指示に、鷺巣数光も、嫌々従って設計したのだろう。そのうち建築家は、ある種の反発と悪意とイロニーを巧みに込めて、この奇妙な建物のプランを進めていったに違いない。

僕は塀をゆっくりとまわりながら、ミケランジェロのダビデ像制作の逸話を連想した。彫刻家が梯子に登って白亜のダビデを彫り上げているとき、下からパトロンが「大変みごとなものだが、いささか鼻がでかい」と批評したところ、ミケランジェロは心得顔で、さっそくノミと金槌を動かし、手に持っていた大理石の粉をぱらぱらと少し落としてみせたという逸話だ。つまり、老獪なミケランジェロという芸術家は、ちょっとした演技によって、まんまと相手を騙して納得させた、というエピソードである。

依頼主と芸術家の関係は、現代でもクライアントと、クリエイターとの関係にもよく見られることだ。そういう意味では、奇妙な違和感を与えるものの、鷺巣氏が自分の創作力で遊ぶことのできた会心の作であるのに違いない。

この建物の造型には、何か激しいブラックジョークのようなものを感じてならない。丹下喜作の虚栄心を伝えていると同時に、その施主の権力意志へのイロニーすら、ここに表現している。

つまり、建築家は、丹下喜作という虚栄と権力欲の亡者を獲物として、彼の設計した「檻」の中に捕えて秘かに復讐している――と見るのは、深読みすぎるだろうか。というのも、僕自身が、喜作会長の自分史制作の中で、誰かが読み取れるような秘密の暗号を残しておきたいと、薄々考え始めていたからなのだ。

そんなとりとめのないことを、つらつら考えながら西側の角をまわると、それまでヒマラヤ杉で隠れていた一画が現れた。

そこには、城の櫓のようなものがそびえており、西の方に窓が開けられているのだ。その窓にいま、傾きかけた西日があたって、金色に輝いている。

「ぷっ。しかし、何ですかなこりゃあ。途方もない。丹下バロックとでもいうしかないな」

色川さんが顎を撫でながら言った。なるほど。言い得て妙だ。バロックとはもともと、「ゆがんだ真珠」を意味するらしい。確かに丹下喜作という人物は、人格がゆがんでいる……。

「ちょっと、あれに似ているな。九段会館。靖国神社の下のところにある結婚式場。あそこってさ、二・二六事件のときの軍の戒厳令司令本部があったらしいぜ」

「九段会館っていうのは、赤レンガと漆喰の白壁で作られた建物の上の方が、お城みたいな変てこな屋根になっているところでしょう。帝冠様式とかいうらしいけど。あそこが二・二六事件の本部ですか」

「そうだよ。知らなかった？ あのクーデターで、陸軍の皇道派は一掃されて、統制派一色になっていった。こうして日本は、戦争にのめり込んでいくことになったわけですね、ツトム君」

色川さんはこで腕組みをして、深く歴史に思いを凝らしているような顔つきをした。猪八戒顔のくせに、無理にシリアスな顔をすると、何だかわざとらしい。

僕はよくドキュメンタリー映画など出てくる雪が積もった緊迫したモノクロ写真を思い浮かべた。戒厳令下の東京市中で、防寒服を着て銃剣を持っている兵士たちが幾並んだ重苦しい写真だ。

言われてみれば、この和様折衷のノスタルジックな私邸の屋根部分は、そんな古めかしくも厳めしい雰囲気漂わせていた。

しかし何といっても特徴的なのは、周囲を囲った高い塀だった。下は石積みになっているが、その上に黒い板塀が延々と連なっている

黒い板塀の上には、鋭い棘が無数の鉄の槍のように並び、すでに朱色を帯びた雲を下から突き上げている。槍の先端は、欧米の漫画に出てくる悪魔の尻尾のように矢印となって尖り、それが狭い間隔で並んでいるので、この塀を越えようとした泥棒は、ひとたまりもないだろう。

「印象悪いね、どうも」

色川さんは、腕を組み、顎をしゃくった。

荊のような黒い鉄条網が、醜くえんえんと絡まりあっているのは、極度の人間不信を造型的に表すと、こうなるのではないかという見本である。戦国大名か、暗黒の中世の城主並みの猜疑心である。豪邸ではあるが、成り金趣味と気違いじみた脅迫観念の合作としか思われぬ。

僕は、会長室に飾られてある威嚇的な虎や鷲の剥製を、連想した。

丹下建設の本社ビル周囲に感じたような不吉な空気――まるで重力異常を起こしているような歪んだ感覚――を、この『丹下氏邸』でもしきりに感じた。

ここは他の家よりも、ヒマラヤ杉などの背の高い樹木が多い。私生活を隠したいのかもしれない。台風ときはさぞかし大枝が揺れて凄みを増すことだろう。大きな暗い炎のような重たい樹木の林立には、ベックリンの陰鬱な絵画『死の島』を思った。

少し塀に沿って歩いてみると、面白いことに、二階には小型の天文台のようなものが設置されているのが見えた。銀色のドーム状の半球形が鈍く輝いている。この奇怪な豪邸と、星の観察などという優雅な趣味が結びつかない。鉄とコンクリートの「檻」を作ることで地を支配しようとする丹下喜作のリアリズムと、夜空の満点の星を憧憬する丹下聡太郎のロマンティシズム、ということだろうか。

雲が割れ、黄色い光が射した。

無骨な小型の迎賓館のような建物が、蜜柑色にふくらんだ低い夕陽を背景に、立体的に浮かび上がった。壁の和洋折衷のレリーフ群も、鮮やかに立ち上がる。小型の天文台の円い側面も、幻のような輪郭を帯びていった。

路上には、尖った槍の影が道路に黒くびっしりと並び、周囲を威嚇しているかのような凄まじい影絵を作った。槍と槍との間に絡む鉄条網の棘までが、くっきりと映っている。

モノクロームの映画の一シーンを見ているように鮮やかだった。

「監視カメラが、こっち向いていますね」

塀の上から紫色に輝くレンズが、斜め下を直視している。正面の門の方はともかくも、陰翳ある華麗さが漂っていたものの、裏側の方はどことなく古い病院の勝手口のような陰惨な雰囲気だった。

「いやだねえ。カジモドみたいな僮僕の下男かなんか出てこないうちに、早いとこ、ずらかろうや」

本人自身がいかにも胡散臭い、黒い革ジャン姿のサングラス男がいった。

僕たちは黙り込みながら、黒々とした高い塀をぐるりと一周して、まだ明るいうちに成城学園の駅に向かった。

電車に乗ると、色川さんは急に思いついたように、最近ハマっているという下北沢のとんかつ屋に、どうしても行きたいと言い出した。

「なんかさ、ああいう異様なものを見ると、当たり前、庶民的な、それでいて旨いものを喰いたって、気にならない？」

なるほど、分からないではなかった。

「ビザールだよな、あれは。ビザール」

『丹下氏邸』が薄気味悪い、といたいらしい。

僕たちは店に入り、厚切りトンカツ定食を注文し、黄昏を深めてゆく下北沢の往来を眺めながら、ビールを一本だけ飲んだ。

「とんかつに、ビール。これをやりたかったんだよ俺。ああ、いいなあ、この、こんがりと平和なきつね色」

色川さんは、むくんだ顔を横にして、とんかつの盛られた皿を、覗き込んだ。

「小津安二郎とかの昔の映画に、出てこないか。勤め人がさ、帰り道に町のとんかつ屋でビール飲むシーン。勤め人てのは……サラリーマンとか、ビジネスマンとか、エグゼクティブじゃないぞ。――勤め人、ああ何と懐かしい響きだろう」

独演会がしばらく続いた。僕はこういうときは、口を挟まないようにしておく。

「勤め人てやつはな、せいぜいトンカツ程度がごちそうなんだ。ぎりぎりでも鮨とすき焼きだな。三星レストランの高級フランス料理なんて食べないんだ。縁側のあるような、ささやかな木造の日本家屋に住んでるんだよ。帰って来ると『もう、風呂は沸いているかい』なんて奥さんにいって、ネクタイをほどきながら、『ときに、尾道のお父さんは元気かい』なんていうんだ。それが日本人というもんだろ。……俺、思うんだが、何か恐ろしいことがないと、あんな館が建つわけがない」

言っていることが、ほとんど意味不明だ。

色川さんの独り語りはともかく、B級グルメの彼のお薦めだけあって、肉も厚切りで、衣もこんがりと揚げてあり、なかなか旨い。フォークで刺すと、肉汁がじんわりと滲みてきた。しゃきしゃきした薄黄緑のキャベツの千切りは、ふんわりと大盛りだ。

食べている最中に、何か連絡事項を思い出したのか、色川さんは携帯電話を取り出して、辛島さんに連絡をとった。

黒メガネに黒い革ジャン姿の色川さんが、辺りかまわず大きな声で喋るので、向かい側に座っていた二十歳前後の重ね着ファッションの女子の二人連れが、さも軽蔑したような表情で耳打ちしていた。

新宿駅の地下街から路上に出ると、外はかなり冷えていた。漠とした夜景に、灰色に霞んだ高層ビルと都庁の建物が、威圧的に聳え立っている。建物の谷間からは白い蒸気が溢れだし、寒気に触れてもうもうと斜めに上昇していく。

アルタ前の人混みでは、マフラーに首の下半分を埋めた三四人の高校生くらいの女の子たちが、待ち合わせていた仲間の到着に、大声ではしゃぎながら手を振っていた。皆、寒いのか、手はちょっとだけ、袖から出している。そして二人の仲間が近づくと、両手を取り合って楽しそうに、上下にびよんびよんと跳ねていた。

――そして、イエス・キリストは、あなたがたのすべての罪を背負いました。イエスと、その証しとを信じなさい。この世の与える富や、栄華は、すべて虚しいものです。あなた方は、お金や名誉などのこの世の物質的な価値に頼りますか、それとも永遠の魂の救いの道を選びますか……。

どこかに街頭伝道の車があるのか、スピーカーからとぎれとぎれになった言葉が、冷たい風に煽られて洩れてくる。

宗教にありがちなこんな押しつけがましい言葉を聞くと、僕はいつも反撥心がわいてくる。ただ、あのクリスチャンの榎野花枝のような女性のことを考えると、あれはあれでいいと思ってしまうのだから、勝手なものだ。はきはきとして性格の強い秘書の芳田慶子と、ときどきズレたことをいうふんわりとした天然キャラの花枝のコンビは、どこか対照的で面白い。榎野さんは、あの性格でよく受付などできるものだと思う。

新宿通りの人混みを通り抜け、僕たちは樹木の間を遊歩道を過ぎて、歌舞伎町裏の店の黴臭い

階段を登った。

「あら色チャン、早いじゃないの今日は。羽木君も一緒ね」

カウンターの椅子に座って新聞を読んでいたらしい『サビーヌ』のママは、入ってきた僕たちを見ながら、氷を砕き始めた。

独特のくすんだ空気が狭い店を支配していた。ちょうど七時になった頃で、まだ客はいなかった。深夜過ぎから翌日にかけて、終電を逃した客が集まるような店なのだ。

右上の隅に、小型テレビがついていた。ニュースが始まっている。

「また、財務省の役人が賄賂もらってるわ。ひどいわねえ最近の官僚は。さっき家のテレビでも、あたしの田舎の県庁の職員が、税金を飲み食いやカラ出張に使ってるとかいう番組やってて、もう頭来ちゃった。どうなっちゃっているのかしらねえ、日本の役人は」

「そういうのは名前と顔写真貼り出して、無駄に使った金、全額個人で返済させりゃいいわけよ」

色川さんは腕組みをして顔をしかめた。

「でもこういう人たちって、あたしなんかと違って、学校時代は優等生だったんでしょ。学級委員長みたいなのに限って、悪い事やるのね」

「いやいや。案外ママみたいに、十六歳で母親になっちゃったような人の方が、ヒトの気持ちがわかるのさ」

色川さんがニタニタ笑った。

「言ったわね。ビール、一万円につけとくからね」

ママが冷蔵庫を開けると、そこだけが明るくなった。ビールや肉類、ハムなどがぎっしり詰め込まれている。漂白されたように庫内からは、ドライアイスのように白く冷えた空気が、ゆっくりとカウンターの底に這い出してくる。

「おい。辛島さんも来るからな。先生、妙に声が弾んでてさ、何かいいネタ仕入れたようだな、ありゃ」

僕も、秘書の芳田慶子から聞いた話を辛島さんに提供できそうなので、ちょっと楽しみだった。

「贈収賄といえば、代議士の船戸川善治郎とか、天下りの谷田部って、丹下建設と何かありますよね」

「そこだよな。辛島さんが嗅ぎつけているのは。あのヒト、趣味だから」

「そう言えば、こないだのロリコンのお役人の話、その後どうなったの？」

ママが小皿にお通しを盛りながら、意味ありげな目で含み笑いをしてみせた。

「それが谷田部のセイウチ野郎だよ。あいつは今、辛島さんが調査中。でも、あんまり言い触らさないでよママ。まだ時期早々なんだから」

そのくせ色川さんは、さっき見てきた丹下会長の豪邸を、細かく描写してみせた。

塀の上に突き出した刺々しい鉄柵を口をきわめて罵倒し、「丹下バロック」だの「喜作ヌーボー」だのと形容して、笑い興じている。

「なんかその、喜作ヌーボーって、まるで田舎の爺さんが、村おこしのために作ったへんてこな

赤ワインで感じよねえ」ママがいった。「きっと、凄くまずいの」

これは色川さんには、バカうけだった。

きっとこの人はこのネタを、新宿や下北沢のあちこちの飲み屋で、最低三週間は披露し続けることだろう。

談合や贈収賄の話題で盛り上がり、淡い紫色の煙の中、数人の客が入れ替った。カウンターは半分埋まり、後ろのテーブル席も二グループほど増えた。

八時を少し過ぎたくらいに、辛島さんが、愛用の流行遅れのショルダーバックを片手に登場した。

灰色のボサボサの髪を、長い節くれだった指でかきながら、ごめんごめんといって、狭いカウンターの後ろに押し入ってきた。

「ちょっと楽しいテープが手に入ったんだよ。最高会議。ええと、ハーパーのソーダ割りね。まずは軽いのから」

ソーダ割りという飲み方が、さも邪道であるかのように彼は弁解した。一見、辛島さんは無造作に見えるが、けっこうダンディなのだ。

辛島さんは僕たち二人を見比べるようにして、痩せたからだを振って、色川さんに耳打ちした。

「最高会議？ 何ですかそれ」

「あれ、羽木君、わからない？」

辛島氏はバッグの中を探り、ウォークマンを取り出した。

「丹下建設のオーナーの家族会議だよ。でも録音状況が悪くて、場所は家なのか会社なのか、はっきりしないんだ。成城の自宅の客間でも、ときどき会議やっているらしいから。れに、この録音、雑音もひどいしね。イヤホン二つついてるから、まあ、とりあえず、聞いてみてよ。僕はもう、三回も聞いてほしい頭に入っているから」

辛島さんは細い目に微笑を浮かべた。それからカウンターに肘をついて、長い指で、グラスを傾けた。

天井から吊るされた電球の廻りに、タバコの白い煙が霞んでいる。

――僕たちはグラスを片手に、イヤホンをつけた。

(続く)